～少女達の雪隠～　A視点

第１話　佳奈美の慢心

今日はなんだかいつもより時間が経つのが早かった気がするなぁ
そう思いながら私平岡 佳奈美は６時間目の国語の授業を受けている
授業が始まって１０分
あと４０分で六時間目も終わり
私は部活動もしてないし帰るだけだけだからいつも帰ったら読書をしている
今日は何の本を読もうかな
ぎゅうううううう
あれ？なんだろう…
急に便意が…
今日は朝出てなかったっけ…
気にならない程度の便意だし落ち着いていよう
それから１０分程経過すると便意が猛烈なものになってきてしまった
「ふへぇ…」
放屁もしたいしなによりこんなに大便がしたくなるなんて
でも平気だよね
子供じゃないんだし我慢出来なくなるなんてことはないよね
それよりも授業に集中しないと

ノートもしっかり取って…

きゅううう…

ダメ…大便したい…

さっきまでは時間が経つのが早いと思っていたのに

今は１０分が１時間にも感じられる

でも我慢…そうそれならあと２時間我慢すればトイレに行ける

２時間くらいなら我慢なんて簡単

それから私の時間で１時間が経つと

「ハァハァ…」

もう耐え難い便意になってしまっている

でも下痢ではないのはわかってる

ただただ強い便意

時計を見ると我慢し始めてから３時間…実際は３０分は経っている

時刻は午後３時２０分

六時間目の授業があと１時間…実際は１０分で終わる

そうそれまで耐えればいいだけのこと

ごぎゅうううう

「ううっ！」

冷や汗がボタボタと垂れノートがところどころ濡れて文字が滲んできてる

何度も放屁は漏れてしまいそうになったけどなんとかここまで我慢できた

手を挙げてトイレに行くなんて事も考えたけど授業を止めたら
真面目に授業を受けているみんなに迷惑をかけてしまう
あと１０分くらい平気
そう思っていると先生がチョークを置く
「もう今日の授業でやる範囲は済んだし次のとこに入ろうと思ったが時間も時間だ」
もしかしてもう終わってくれるの？
「六時間目だし今日は特別に授業は終わりにするか」
やった！これでトイレに行ける
「よし起立」
限界まで便意を我慢していること
即ちそれは肛門に全神経を集中させているということ
それを忘れて授業を早く終わらせたいが為…
何も考えずに椅子から立ち上がってしまった
ぶぶぶぼぼぼぼぼぉ！！！
「あ、あ…」
爆音の放屁が教室中に響き渡る
立ち上がり放屁によって一度開いてしまった肛門
「ダメッ！あぁん！」

ボビュブブブブリッ！！

下着の中に広がる不快な感触

私の身体から力が抜けていく

「嘘、こんな…」

絶望と羞恥が私を襲う

とうとう我慢できずに漏らしてしまった

きっとすごい臭いなんだろうけど頭がいっぱいで私にはわからない

「おいどうした！？大丈夫か？」

心配して先生が駆け寄ってくる

周りもざわざわしている

「あ、あ、あ、その」

恥ずかしさと情けなさで涙が出てきてその場にへたり込んでしまう

ぐちょお

下着の中身が押しつぶされて隙間から溢れ出てくる

ここで私の意識は途切れてしまった…

気がつくと保健室のベッドで横になっていた
立ち上がってみると誰かが着替えさせてくれたのかジャージになっている
「あのー…」
返事はなく誰も保健室にいる気配がない
ベッドの隣には私のカバンが置いてある
帰ってもいいのだろうか
でも職員室に顔は出さないといけない
嫌だな…
先生ならバカにしてくることはないだろうけど…
気持ちの問題
窓から外を見てみるともう暗くなっている
はぁ…どうしてこんなことに
そもそもどうして下痢でもないのに我慢できなくなったんだろう
あぁ…すっごい出てたよね…
誰かが片づけてくれたんだよね
本当に情けないし申し訳ない
明日からどんな顔して教室入ればいいんだろう
ガララララッ
扉を開く音が聞こえ扉の方を見る
「あ、起きたんだね」
そこには見慣れない女子生徒が立っていた

「えっと…あなたは」
「わたしは隣のクラスの保健委員の能島 高嶺だよ」
隣のクラスの子か
「えっと、災難だったね」
「う、うん…」
「みんな心配してたよ、もうお腹は大丈夫？」
体調が悪かったわけじゃない
ただただ我慢出来なかっただけなのに心配なんてしてもらったら…
それにここに運んでくれた人にもお礼と謝罪をしないといけない
「あの…能島さん、ここには誰が運んでくれたのかな？」
「あーそれはわたしだよ、掃除してくれたのはクラスの子だと思うけど」
「えっ、なんで能島さんが？」
「保健委員だからね」
「でもクラス違うし…」
「わたしが廊下を通ったとき騒動になっててね」
「そんな大騒動に…ってことはお漏らししたの隣のクラスにもバレてるんだよね…」
「ううん、わたしが適当に誤魔化しておいたから平気だよ」
「そ、そうなんだ…ごめんね…汚かったよね？」
「うーん、綺麗ではないけどそんな気にしちゃダメだよ？」
遠回しに汚かったとは言ってるけど優しい人だな…

「もしかして…着替えも？」
「うん、お節介だったかな」
「お、お節介だなんてそんな」
「おパンツは取っておいてあるけどどうする？」
「そ、そうだなぁ…一応持っておこうかな」
すると彼女はベッドの下から袋を取り出した
「そっか…はい…こんもりなってたうんちはトイレに流しておパンツはビニールに入れておいたからそのまま持って帰っても大丈夫だよ」
こんもりなってたんだ…
というか能島さんパンツの事おパンツって言うんだ
なんだかエッチ？だなぁ
「ありがとう、こんなとこまで手間かけさせちゃって」
「ううん、佳奈美さんが思ってるほど大変じゃなかったから」
すごい気を遣ってくれてる…
って…私のしたアレ…見たって事だよね！？
じゃあ下痢じゃないのわかってたよね…
「あのさ…その…下して漏らしたならちょっとは仕方ない感じするけど…私の違うって気づいたよね…」
「うん…でもクラスの子達にはすごいお腹の具合悪かったみたいって言っておいたから！」
「でも…そんなの漏らしたとこの汚れ方でわかりそうだけど…」

「あー、佳奈美さんお尻から倒れてたでしょ？それでいい感じに汚れてたから大丈夫だよ」
大丈夫ではないけどそれなら大丈夫かな？
「それに気を失っちゃうほどいっぱいいっぱいになってた佳奈美さんを責める子なんていないよ」
あ、そっか…気失うほどの人間を責める人はさすがにいないか…
ちょっとは噂されそうだけど…
「じゃあそろそろ帰ろうかなー」
「あれ？そういえば能島さん部活で残ってたの？」
「違うよ、佳奈美さんが心配だったから」
え？私の為にこんな暗くなるまで残っててくれたの？
なんでここまでよくしてくれるんだろう
「佳奈美さんももう帰れる？」
「うん…でもどうしてここまで私に良くしてくれたの？」
「うーん、とくに理由はないんだけど…強いて言うならわたしもちょっと前に…お漏らししちゃって他人事と思えなくて」
能島さんもお漏らししたことあるんだ…どっちだろう…
「ってごめんね、言いたくない事言わせちゃって」
「いいって、こうやって言った方がスッキリできるからね」

発散できるって事かな

たしかに抱え込むよりいいのかも…

私みたいに漏らしてて気にせず言える相手なら…

「じゃあまたね！」

「ありがとう、またね」

能島さんを見送って私もカバンを手に取って保健室を出る

この後職員室に寄ったら先生方に体調を心配されたけど…

ただただ普通に我慢出来なかっただけだからやっぱり申し訳なかった